夢童

菅波　茂

パキスタン北部地震救援活動

10月8日。パキスタン北部のカシミール地方を中心に大地震が発生した。01年1月に起きたインド西部大地震と同様、石と土で作られた家屋は簡単に崩壊し、5万人以上の死者が出た。

道路が寸断され、険しい山々に点在する村々には援助物資が届かない。ヘリコプターによる救援も、着地する場所がなくて不可能。貴重な救援物資をめぐって被災者同士のトラブルも多発。この地域では初めての大地震だった。被災者は余震に加え、再び大地震が起こるというデマによる不安におののいていた。しかも厳しい冬の到来が近い。最悪の状況だった。

発生当日、AMDAインドネシア支部長のタンラ氏とネパール支部長のアーチャリア氏から連絡が入った。「医師団を派遣できます」と。すぐにバングラデシュ支部とインド支部にも医療チーム派遣を要請した。同時に、パキスタン南部クエッタでアフガン難民支援活動を実施している本部直轄の医療チームに派遣を指示した。

翌10月9日からAMDA多国籍医師団として続々と現地入りした。パキスタン支部は軍と協力して最も深刻な被災地で活動した。ただし、インド支部はカシミールの領有をめぐるパキスタンとの政治上の理由で、医療チーム派遣が不可能になった。

AMDAはバラコットとマンセラの2カ所で医療活動を行った。バラコットでは、家屋の崩壊した村が、無事だった小学校を診療所として提供してくれた。女性医師しか女性を診察できない部族社会では、AMDA派遣の女性医師は大歓迎された。

マンセラには政府の救急病院があり、パキスタン政府の要請を受けてハムダード医科大学チームが活動していた。ハムダード医科大学はAMDAの姉妹団体であり、創設者のハキム・モハメッド・サイド先生はAMDAの名誉顧問だった。このチームと一緒にいることはAMDA多国籍医師団にとって最大の安全保障になると判断した。

なぜなら、被災地の部族社会には銃がごろごろあり、インドとのカシミール問題で過激派がいた。派遣者がトラブルに巻き込まれた時の安全確保を心配していたが、サイド先生は98年にAMDAが提唱した「すべてのアフガニスタンの子供たちに予防接種をするまで停戦」という医療和平で、当事者だったタリバン政府と北部同盟にAMDAを紹介してくれた。双方に信頼されていたサイド先生は、汎イスラム運動で有名だったのだ。

ネパールとバングラデシュの医療チームは被災地の言語であるウルドゥー語が話せた。彼らにはパキスタンの医学部や修士課程の留学経験者が多く、被災地の風俗・習慣を熟知していた。医学は科学だが医療は文化である。通訳なしで活動できた効果は大きい。AMDA多国籍医師団の妙味であり強みである。

AMDA多国籍医師団を支えてくれる国際ネットワークの存在の有難さをつくづく感じた。今後も「救える命があればどこへでも」というスローガンをより完璧に実践できるように、国際ネットワークの拡充に尽力したい。

（AMDA代表）

＝題字は筆者